

いのち輝く未来社会をめざして～

TURU

DREAMS COME 鶴～



「認知症になっても笑顔で輝けるまちをつくりたい」

そんな思いから2018年4月に「ゆめ伴プロジェクトin門真実行委員会」（以下、ゆめ伴プロジェクト）はスタートしました。今回は、4月13日から始まる大阪・関西万博に参加するゆめ伴プロジェクトを取材。万博を通して世界中の皆さんへ伝えたい思いなどを伺いました。

ゆめ伴プロジェクトでは、認知症になっても社会の一員として役割を持ち、活躍できる機会や場を創出することを目的として活動に取り組んでいます。

総合プロデューサーを務める森安美さんはケアマネジャーとして認知症の方やその家族と関わる中で、「認知症のお母さんに、以前のように輝いてほしい。できることも、やりたいこともまだまだあるはず！」という家族の切実な声を聞きました。これを機に、門真市内の介護事業者や地域団体、社協、行政などが連携して、ゆめ伴プロジェクトが発足しました。

● ゆめ伴プロジェクトの取り組み

ゆめ伴プロジェクトでは、さまざまな活動に取り組んでいます。

「RUN伴+門真」は、認知症高齢者や要介護高齢者が、家族やサポートとペアになり、約200人でゴールをめざして町を歩きます。

また「ゆめ伴ファーム」では、認知症の方が暮らすグループホームの一角にある畑を活用し、認知症の方や地域住民がともに土を耕し、綿花や野菜の栽培を行っています。

● 認知症の方がまちづくりの主人公へ

これらの活動は、野菜を育てる、軽作業をすることだけが目的ではありません。認知症当事者自身が楽しく活動し、誰かとながら続けることを意識しています。

「それぞれの取り組みは目的のための手段。認知症の方が地域の方とともに楽しみ、ともに夢を描き、ともに体験することで、まちづくりの主人公となることを大切にしています」と森さんは語ります。



ゆめ伴プロジェクトin門真 実行委員会 総合プロデューサー 森安美さん

「ゆめ伴サロン」では、小物づくりなどの手作業を行ったり、近隣病院の地域連携室による健康体操などを実施したりしています。

● 折り鶴を通してつながりを

コロナ禍がきっかけとなり、在宅でも認知症の方や家族が社会とつながることができる活動として、「折り鶴プロジェクト」がスタートしました。

2021年からは、認知症の方や高齢者が折り鶴づくりの担い手となり、地域の方たちとも力を合わせ、「いのち輝く折り鶴100万羽プロジェクト」に取り組みました。これは、2025年大阪・関西万博の会場や各地に100万羽の折り鶴を飾り、世界中からの来場者をお迎えすることをめざした取り組みです。

また、イズミヤショッピングセンター門真において2023年から「いのち輝く折り鶴JAPAPANパビリオン」



全国から届く折り鶴を糸でつなげています



イズミヤショッピングセンター門真での折り鶴の展示

「ただたくさん折り鶴を集めることを目標にしたのではない。介護が必要な高齢者でも折り鶴のはじめの三角形は折ってもらう。すべての作業を一人でする必要はなく、みんなで分担することで、「コミュニケーションを生み出すことを大切にしてきた」と森さんは話します。

全国から送られてきた折り鶴をつなぐ作業に参加している方からは「折り鶴を折ったりつなげたりすることがい

きがい。万博が終わっても、これからもみんなと一緒に折り続けていきたい」と夢を語ります。

● 万博に参加!!

大阪・関西万博では、認知症の方や高齢者などが中心に折った約5万羽の「いのち輝く折り鶴」を、万博会場内の来場者休憩所の壁面に飾ることにしました。そのほかにも、8月2～3日に折り鶴の展示イベントを行います。また、万博開幕まで、大阪モノレールでは折り鶴で車内が彩られた車両が走行。日本各地の商業施設や高齢者施設などにも折り鶴を飾って街を彩り、世界中からの来場者を迎えます。

● いのち輝く未来社会のデザイン

森さんは、「万博のテーマが『いのち輝く未来社会のデザイン』と聞いて、私たちがやってきたことはこれだと感じたと」言います。

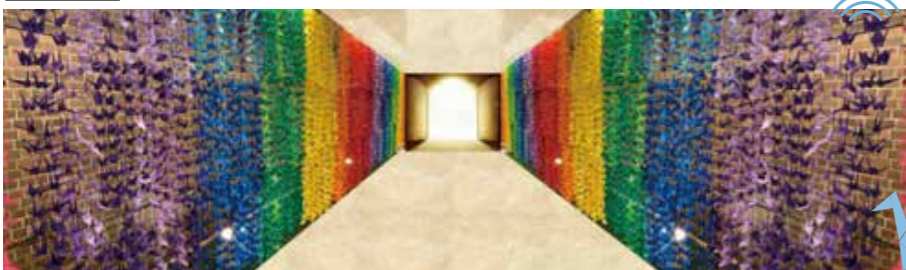
「認知症になっても希望を、孤立ではなくつながりを、あきらめではなく夢をもてる」ことを意識して活動してきたゆめ伴プロジェクト。農園やサロン、スポーツ、さまざまな方法で、たくさんの方がつながり合い、笑顔になれる活動を続け

てきました。

万博では、約2800万人の来場が想定されています。万博を通してみんなの思いをのせた折り鶴が、地域や立場を超え、さらに国をも超えて、人と人をつなぎ、いのち輝く笑顔の輪が広がることを願っています。



ゆめ伴プロジェクト HPはコチラ



来場者休憩所 展示イメージ (画像提供:ゆめ伴プロジェクト)